

福島原発事故に関する情報 2 題

ガンダーセン博士の福島原発事故に関する解説(4/26)

<http://www.youtube.com/watch?v=P4KXX24Dv1U&feature=related>

日本政府は事あるごとに「事故に関しては包み隠さず全てを開示します。」と約束して来たが、早くも3カ月、全く改善される様子が見られず、表面的な現象だけが小出し、小出しに発表され、肝心なことは隠されて続けている。

国民はジグソーパズルのピースを小出しに与えられているようなものである。肝心なピースは隠され続け、情報操作の迷路の中に誘い込まれている。

ところがアメリカ在住の原子力技術者で学者の「ガンダーセン博士」は独自のニュースを発信し続けている。他にも外国には発信者がいるようだが、私の目に止まったのは氏の解説だ。氏は東電と日本政府の隠蔽体質に義憤を感じ、日本国民のおとなしさに同情して、粘り強く情報発信をしてくれているらしい。

氏が得たデータは、極めて限られているはずだが、驚くほど詳細な爆発のメカニズムや大気汚染の規模などが語られている。原子力には素人の私にも判り易く、理路整然として説得力がある。

ご興味のある方は是非見て下さい。

Googleで「ガンダーセン博士+福島原発+ユーチューブ」と検索すれば、氏が毎週のように発信している論説がいくつもあります。元情報（<http://www.fairewinds.com>）を匿名氏がユーチューブに転載しているようです。他に引用・転載・和訳などありますが、一方ではどんどん削除されています。

氏の結論のごく一部だけを要約すると、1号機は規模の小さい、単純な水素爆発であるが、3号機は、はるかに規模の大きい爆発であり、大量の汚染物質をまき散らした。使用済み燃料プールの中にあつた燃料棒が飛び散り、ウランなどの重い元素が揮発して、重元素の微粒子は遠くアメリカ本土にまで達しているという。

3号機爆発のメカニズムも詳説している。水素爆発の衝撃波によって空焚き状態にあつた使用済み核燃料プール内の燃料棒が激しく衝突し、そこで局部的に即発緩和臨界という状態を起こして大きいエネルギーを発生し、燃料棒を上方に噴出させたと言う推理である。ウラン及び超ウラン元素（プルトニウム・アメリシウム）が放出され、ハワイやアメリカ西海岸、更にはニューイングランド（米国ノースダコタ）でも検出されたという。

そしてチェルノブイリが内陸にあつたのに対して、日本は海上への放射能拡散が主だったため、内陸部の被害が比較的少なかった。風が海上に吹いていた日本は非常に幸運だった（日本の元原子力保安院の専門家からの情報とのこと）。

即発臨界についてはウィキペディアにも解説があります。高速中性子による臨界状態を指し、2007年4月24日NHKクローズアップ現代では、北陸電力の臨界事故について取り上げられ、即発臨界が起きていた可能性があるという説明があつたとのこと。このHPは今では削除されています。

博士が強く義憤を感じた理由は、東電が一度は「中性子線の13回にわたる検出、及び塩素38、テルル129などの検出」を報告したにも関わらず、すぐ後に取り消すという悪質な隠蔽にあるようです。

氏の推論が全て正しいとは言えないかも知れませんが、この「想定外の事故」の收拾能力において、日本の原子力村との科学総合力、情報発信力についての大きな落差を感じざるを得ません。

CTBT（放射性核種探知観測所）のデータ

http://www.cpdnp.jp/pdf/110617Takasaki_report_Jun11.pdf

(<http://www.cpdnp.jp/> から最新バージョンを見ることができます。)

高崎に設置されているCTBT放射性核種探知観測所のHP

このHPの付表は必見の価値があります。原発から空中に放出される放射性物質の量は大幅に減っているが、4月23日においてはまだ止まってはいません。

さてCTBTは地下核実験によって放出される微量放射性核種を検出するため、極めて精度の高い分析を行っています。まず大気を24時間かけてフィルターを通し、捕集した成分を分析試料としています。

連日、発表されている「空中放射能の値」が地上に溜まった放射性汚染物の簡易な尺度であるのに対して、これは直近24時間に新たに飛来した物質だけを精密分析しています。

ただし後記されるように、風で舞い上がったとか、雨で落ちて来たものも含まれるので、原発から直接飛来したものととの区別は出来ません。しかし、表を見れば誰でも一目瞭然、傾向が分かります。専門家なら半減期から、何日頃に核分裂したかが推定できるでしょう。

高崎観測所では、3月12日～13日の捕集試料から、複数の放射性核種が検出され始めた。即ち、セシウム(Cs) -134、136及び137、ヨウ素(I) -131～133、ランタン(La) -140、テルル(Te) -129、129m及び132、テクネチウム(Tc) -99m、等である。

最も高い濃度は3月15日～16日の捕集試料、第二のピークは3月20日～21日の捕集試料、第三のピークは3月29日～30日の捕集試料であった。また、3件の補足説明がある。

- 1) 3月20日～21日のピークは、降雨による影響の可能性が高いとしている。
- 2) 3月29日～30日のピークは、やや強い風に舞い上げられた埃が原因ではないかとの推測もあるが、確定は困難としている。
- 3) 3月21日のキセノンのピークについても、降雨による影響が高いものと思われるという。

4月に入ってから、下る傾向ながら、上ったり下ったりして推移しており、収束に向かっているようには見えない。

ヨウ素(I) -132 は半減期が3.26日で、非常に短い核種だが、4月17日以降になってようやくブランクになった。(レポートの最終日は4月23日)。

地震・津波直後の爆発以降、4月に入ってから時々、核分裂反応が起こっているのだろうか。炉からの放出は止まっていないのか。それとも雨や風の影響が大きいのか。疑問は少しも解消しない。

今後は、風や雨などの気象現象による攪拌作用、川底・下水処理場・海底への濃縮、食物連鎖などが大きい問題になるだろう。

あとがき

「備えあれば憂いなし」の諺の逆をやっているのだから、小手先で何をやっても爆発は防げなかっただろう。現場の生命を削るような努力のお陰で何とか現状程度に抑え込んできたのだろう。起こってしまった以上、肝心な情報を開示するのが、関係者の最も重要な使命だと思う。今までにどんな核種をどれだけ排出してきたのか。その行方はどこなのか。

幸運にも(被災者には申し訳ないが)、大部分は偏西風に乗って東方海上に飛び去ったのか(ポリネシアやアメリカにも申し訳ないが。なお風向きによっては首都圏が大規模に大量汚染されていた)。それとも

大部分が国内に降り積もったのか。最大の関心事だ。

また今現在は何がどの程度出ているのか、何日頃までに止める積りなのかも大きな関心事なのだが、これも正式発表はない。

東電と政府の意図は、少しでも事故を矮小化することにある。「心配ない、原子炉は正常に止まり、抑え込みはうまくいっている。」と言い続けたのに、いよいよ誤魔化せなくなると最初の段階からメルトダウンしていたことは判っていたなどと臆面もなく白状する。

何が起きているのか、全く信用できない。

しかし、これはマスメディアにも大きな問題がある。真実を発信するという使命を忘れ、東電・政府の発表をただオウム返しにしゃべっているに過ぎない。NHKは特にひどい。完全に政府の代弁である。爆発の映像については視聴者が受ける印象を弱くするよう、工夫を凝らしたのだろう。

ルモンドなどの映像は衝撃的だった。自国民に避難命令を出したのは当然だろう。なお爆発の映像はインターネットからもだんだん消えてゆく。

ガンダーセン博士の爆発映像に基づく解説も、CTBTのデータも、そのうちに消えるのではないかと心配しています。今なら読めます。

最後に、津波ではないが、暴風雨の中の巨大波についてひとこと。昔から海の男たちは、暴風雨の中で10階建てのビルのような巨大な波（水の壁）に出会ったことを語ってきた。しかし世間では海洋小説、フィクションの世界のことと見られていた。

科学者らの見解ではそうした超巨大波は一万年に一度起こるか起こらないかといった程度のもものと言われ、船舶の設計条件には考慮されていなかった。しかし20年間に、凡そ200隻以上の大型タンカーが「異常気象」を原因として、謎の沈没をしていたらしい。

日本でも1969年、鉱石運搬船「ぼりばあ丸」（総トン数33768トン）が千葉県野島崎南東沖合を航行していたところ、突然2番船倉付近から折れ、たちまちにして沈没、救助されたのは2人だけ。犠牲者は30人にのぼった。

そして翌、1970年2月にも、野島崎東方沖合で大型鉱石船「かりふおるにあ丸」（総トン数34000トン）が沈没し、5人が死亡する事故が起きた。度重なる新造大型貨物船の遭難事故は、当時の日本造船業界に大きな衝撃を与えたが、設計基準は変わらなかった。

ところが2001年、欧州宇宙機関（ESA）の人工衛星によって海面が直接観測されたところ、高さ25mを超える超巨大波が10以上存在していた。これにより、この問題は一挙に決着した。高い波が重なり合うことによって、超巨大波ができるという。

判ってみれば簡単なことだったらしい。

現場を知らない学者はどうしても自然の恐ろしさを甘く見る傾向になるのだろう。優秀な人ほど自信も強いだろう。政治が絡んで、一旦国策になると、途端に責任の所在が曖昧になり、ブレーキが利かなくなり、暴走してしまう。困ったことである。

松平 忠志（応化会）